

---

**可愛いもんには目が無い。**

abcdeftech

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

可愛いもんには目が無い。

### 【Nコード】

N5691I

### 【作者名】

abcdefghijklmnop

### 【あらすじ】

主人公の友貴は可愛いもんが大好き。男であろうと可愛いもんは可愛いんです。

そんな友貴やその友達の学校生活のお話。

## 転校生との出会い。

6月も明け少しずつ暑くなっている季節。

いつもと何かが違う気がした。

なんか楽しそうなことが起こるようなそんな気がした。

「ヤバイ遅刻だ!!」

いつもより30分遅く起きた友貴はベッドから飛び起きた。

時間が無い今、朝ご飯を食べてる暇など全く無い。

学校へ行く準備を終えると走って自室を出た。

「あら友貴君おはよう。」

「お兄ちゃんおはよう。」

「おはようございます。」

隣に住んでいる奥さんやその子供に挨拶をすますと友貴は走っていった。

一人暮らしをしているアパートから学校までは走ると15分程度。

昨日降った雨の所為で今日はやけに水溜りが多い。

だがその水溜りに映った青空がきれいで少し見惚れていた。

「こんな事してる暇無かったんだ。」

水溜りを飛び越えまた走っていった。

遅刻はしなかったがアパートから全力で走って来た疲労感は強く席に着くとすぐに机にふせた。

「珍しいね。友貴が遅刻ギリギリなんて。」

友貴の前の席の愁はふせている友貴の髪をいじっていた。

「たまにはこんな事もあるよ。」

「そうだね。そういえば今日転校生が来るんだって。」

「マジで。それって女の子だったりする？」

友貴は勢いよく起き上がった。

それにビククリしながら愁は笑っていた。

「さあ、でも目撃情報によるとスゴイ可愛い子なんだって。」

「やったー。俺の時代が来るかも。」

「来るといいね。」

意味ありげな笑顔で愁は言った。

2人で盛り上がっていると教室の扉が開いた。

「ほらHR始めるぞ。」

担任の先生が入ってくると教室はすぐに静かになった。

「知ってる人もいると思うけど今日は転校生が来てます。じゃあ入ってきて。」

その言葉のあと教室の扉が開いた。

入ってきた人を見て教室にいた全員が静まり返った。

少しすると女子が急に騒ぎ始めた。それに続くように男子も少しずつ騒ぎ始めた。

「初めまして。今日からここでみなさんと勉強させていただく事になりました、上山亜希人です。」

先生の隣に立っている上山亜希人はとてもキレイな顔立ちだった。

しかし名前の通りズボンを穿いている。つまり男なのだ。

「愁お前騙しやがったな。」

「なんの事？僕分かんないなー。」

愁は笑いながら振り返った。

友貴の両隣から友達の九条祐介と柴田涼介が話しかけた。

「めっちゃくちゃ可愛いな。優ちゃんと愁ぐらい可愛い。」

「俺も思った。アレが男とか勿体無いよな。」

「僕可愛く無いんだけど。」

愁は頬を膨らませた。

「そういう所が可愛いんだって。」

柴田は愁を見ながらにやけている。

「ここでイチャイチャすんなよ。」

九条が呆れたように言った。

「友貴的にどう？転校生は。」

「聞くまでもないだろ。」

「だな。」

友貴は当たり前とばかりに九条の質問に答えた。

「本当に変わってるなお前。可愛いものはなんでも好きだもんな。」

「女はもちろんキャラクターや動物も可愛いもんが好き。なら男も同じでしょ。」

「それでいいのか悪いのか。」

九条はまた呆れたように言った。

すると友貴は愁の頭に手を置いた。

「いいに決まってるだろ。俺の心が満たされる。だから愁は最高なんだよ。」

「そこ静かにしろ。」

いつのまにか自己紹介は終わって、先生が座る場所を教えていた。

転校生 上山亜希人は窓側の一番後ろの席に座った。

友貴は上山をずっと見ていた。

「友貴見すぎ。」

愁は呆れたように言うのと友貴の頭を叩いた。

「確かに今のは見すぎだわ。」

柴田が笑った。それにつられて友貴も少し笑った。

「そんなに見てた？」

「ガン見もガン見。」

友貴はそう言われて少し見るのを控えた。

その後一時間目の授業が終わると上山の周りには人でいっぱいだった。同じクラスのやつに加えて他のクラスの生徒、更に他学年も見に来ている。

「人気者ですなー。転校生。」

「僕達近づけないね。」

「可愛いもんを見るためにあの人ごみに行けるか？」

「行ける訳無いだろ。なあ友貴。」

柴田の質問に答えた九条は意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「友ちゃん。おはよう。」

「優ちゃんおはよう。」

「違う可愛いもんが来たな。」

挨拶と同時に友貴に優が走って抱きついた。

「相変わらず可愛いな優ちゃんは、愁も見習って欲しいよ。」

友貴がそう言うと愁はさっきと同じように頬を膨らませた。



「「かーわーいーいー。」」

友貴と柴田が互いの顔を見合わせて笑った。

友貴は席に座り自分の膝に優を乗せた。

九条がそれを見て笑った。

「でた優ちゃんの特等席。」

「転校生さん人気だね。」

「だね入学した時の優ちゃんと愁みたい。」

「確かに2人とも人気だったもんな。」

「いまじゃ2人とも友貴に懐いちゃって。」

「懐いてない。」

柴田の冗談に愁が怒った。

「それに僕達より青山の方がすごかったよ。」

「アイツは別格だろ。」

「確かに青山くんは凄かったよね。」

「まああんな奴より愁と優ちゃんの好きだけだな。」

「僕も友ちゃん好きー。」

「柴田と愁だとイライラするのに何故か友貴と優ちゃんは大丈夫なんだよな。」

「なにそれ。」

「俺たちが気持ち悪いみたいない言い方しやがって。」

「むしろお前だけが気持ち悪いんだよ。」

「九条酷い。」

柴田は泣きながら愁に抱きついた。

愁は柴田の頭を撫でている。

「あ、テメー柴田。愁に手出してんじゃねーよ。」

「本当独占欲強いな。」

「柴田だとどうしても許せないだけ。」

「俺の扱い酷くない？」

## 転校生は人気者

転校生 上山亜希人が来てからの授業は集中することが出来なかった。

昼食の時間も転校生は色々な人に囲まれていた。

友貴達は学校にある食堂で昼食をとっていた。

「結局転校生と一回も話してない。」

「そんな落ち込むなよ友貴。愁と優ちゃんがいるだろ。」

「友ちゃん大丈夫。いつか話せるようになるから。」

「いつかって。」

友貴は優の方を見てまた落ち込んだ。

そんな友貴を見て九条と愁が笑った。

「可愛いもんハンターのお前が珍しいな。愁と優ちゃん時はあんなに頑張ってたのに。」

「そうだよ。あの時みたいに何度もその人の所に行けばいいんじゃない？」

「あの時は生徒が愁と優ちゃんと青山に別れてたから今より大分少

なかった。」

友貴はカレーを一口食べてため息を吐いた。

すると急に食堂が騒がしくなった。

「友貴ー!。」

「げっ、青山だ。」

食堂が騒がしくなった原因 青山が友貴の方へ走ってくる。

それと同時に周りにいた人達もぞろぞろとやってきた。

「げってなんだよ。友貴に会いに来たんだよ。」

「会いに来なくて結構です。」

友貴は青山を見上げた。

青山は友貴を見ながらニコニコと笑っている。

ただ笑っているだけなのに周りからは悲鳴にも聞こえる歓声がある。

友貴はまたため息を吐いた。

「そういえば友ちゃんと青山君はなんで喋るようになったの?。」

「そつだよ青山と転校生、周りにいる人数は同じだと思うけど。」

優と九条の言う通り入学当時青山の周りには今の転校生の時と同じくらい人が集まっていた。

「中学の時バスケットやってたんだよ。俺と青山。」

「へえ、それで？」

「大会とかでたまに青山の中学と戦って俺が青山のマークしてた。」

「それだけ？」

愁はそういうと小首を傾げた。

「愁かわいい。」

友貴はそう言うのと愁に抱き着こうとした。

だが青山が友貴の肩を掴んだ為それは実行されなかった。

「それでねコイツめちゃくちゃ上手くてさ。」

「テメー俺と愁の仲を邪魔しようっていうのか？」

「俺の中でバスケット上手い奴に悪い奴はいないって考えがあつて。」

「シカトがコラ。」

友貴は立ち上がり青山の肩を掴み揺らした。

「友貴。もう無理、気持ち悪いって。」

「シカトする方が悪いんだぞ。」

友貴はまた座りなおしカレーを食べた。

「さっきの続きだけど、高校たまたま同じで俺から友貴に喋りかけたらやっぱり良いやつでさ。」

「友貴と青山って仲いいの？」

「は？何言ってるの柴田。」

「え、俺変なこと聞いた？」

柴田の質問に友貴は驚いた。

そして青山と顔を見合わせた。

「普通に仲良いけど。な？」

「うん。誰がどうみても仲良いと思うけど。」

「でもさっき「げっ」とか言ってたじゃん。」

「あれは青山が嫌なんじゃなくて、青山が来ることで起こる歓声が嫌なんだよ。」

「へえそうなんだ。てっきり友貴は青山が嫌い、青山は友貴のことが好きなんだと思ってた。」

柴田がそう言うと愁と優が頷いていた。

「俺は知ってたけどな。」

九条がそう言って立ち上がった。

それに続いて柴田、愁も立ち上がった。

「ちょっと待てよ。俺もすぐ食べ終わるから。」

そういつて慌ててカレーを食べる。

「そんなに急がなくていいよ僕待ってるから。」

「さすが優ちゃん。名前の通り優しいな。」

友貴は優の頭を撫でた。

それに対して優も嬉しそうに笑った。

そのあと結局みんな待っていて一緒に食器を片付けた。

食堂から教室に戻るとまだ上山の周りは人でいっぱいだった。

すべての授業が終わりほとんどの生徒は部活や帰宅して教室からいなくなっていた。

「結局転校生と話せなかったよ。」

「僕もダメだった。」

「俺も全然ダメ。」

「友ちゃん僕もダメだった。」

優は相変わらず友貴膝の上に座っていた。

「九条は？」

「そもそも話しかけようと思ってなかったし。」

「なんでだよ。あんな可愛い子に話しかけないなんておかしいぞお前。」

「みんながみんな可愛ければいいって訳じゃ無いんだよ。俺はやっぱり女の方が良いわけ。」

「愁や優ちゃんの方が可愛くても？」

友貴の質問に九条は2人を交互に見て真剣に考えていた。

「これだけ可愛い女の子なんてそういないから少しくらい妥協するよ。」

「この学校だったら誰が良いんだよ。」

「三大美女に決まってるじゃん。」

九条は当たり前のように言った。



「一個上の福森明菜に同級生の小池蛭そして保険医の水谷麻耶先生だ。」

「やっぱり愁と優ちゃんと互角なのはあの3人ぐらいしかいないか。」

「俺はその中だったら断然水谷先生だな。」

「お前年上趣味だったのか？」

柴田は友貴の発言に驚いていた。

「あの中で可愛いのは水谷先生だろ。年上なのにとって所がギャップで可愛いんだよ。」

「他2人はどうなんだよ。」

「他2人はキレイなんだよ。可愛くは無いんだよ。」

友貴は立って力説した。

「あの3人は誰が見ても美人なんだけど可愛いとはまた違う。そこ一緒にしてもらっちゃ困るな。」

「なにが困るの？」

「色々と困るんだよ。優ちゃん。」

「アホらし。」

「ナイス愁。今は俺達の代表としての言葉だぞ友貴。」

柴田が笑いながらいった。

つられて九条も笑った。

「そろそろ帰るか。」

「そうだね。もう5時30分過ぎたし。」

みんな立ち上がり自分達の荷物を背負った。

「今日どうする？コンビニ寄ってく？」

「僕パス。今日お金ないから。」

「愁なら奢ってやるよ。」

「やった柴田サンキュー」

「やった柴田サンキュー」

「お前には絶対奢らない。」

愁を真似て九条も同じことを言った。

「酷いな友貴。あいつ愁にしか奢らないんだって。」

「酷いな優ちゃん。あいつ愁にしか奢らないんだって。」

「え、あ、酷いね。」

「お前ら優ちゃんに変なこと言わせてんじゃねーよ。」

柴田は2人だけならなんともないが流石に優に言われると少しへこむらしい。

柴田は2人を追い掛け教室中を走り回っている。

「優ちゃん僕達だけ先行ってようか。」

「うんそうだね。」

そんな3人を置いて愁と優ちゃんは教室を出て行った。

置いてかれたのに気付いた3人は走って2人の所へと向かった。

コンビニ前でも少し話したあとみんな解散した。

もう6時半を過ぎたのに日はまだ落ちていなかった。

「もう夏か。」

アパート前、朝と同じ所にある水溜りが大分減っているのを見て咳いた。

自分の住んでいる部屋の前で鍵を開けていると隣の部屋から人が出てきた。

今朝あつた奥さん達が住んでる部屋とは反対の隣だつた。

最近まですつと空いていて1週間くらい前にその部屋も誰かが入ると決まつたのだが誰が入るのか見た事はなかつた。

少し興味を持っていたので軽く会釈するくらいして顔を見ようと思つた。

「あ。同じクラスにいた人。」

少し甲高い声。肩まである黒い髪。女と間違える程の可愛い顔。

あまりにも急な再会で、会釈はできずただ呟いていた。

「・・・上山亜希人。」

まさかの転校生。

「……上山亜希人」

思ってもみなかった再会に友貴はそれ以上言葉が出てこなかった。

「ごめんね。僕まだ君の名前知らないんだ。」

「あ、各務友貴。」

我に帰った友貴だったが、衝撃が大きすぎてまだ自分の名前を言う事しか出来ない。

それを見た亜希人はフフと笑った。

「今から買い物行くんだけど、もしよかったらどこか安いお店教えて。」

「……………」

「迷惑だよね。やっぱ。」

「そんな事ない。行く。絶対行くから待ってて。」

友貴は急いで部屋に入ると鞆を置きすぐに私服へと着替えた。

財布を持ち、訳もなく鏡を覗いた。

「よし、大丈夫。」

友貴が部屋から出ると亜希人が扉のすぐそばに立っていた。

落ち着いた今、亜希人を見ると学校で見た制服ではなく私服だった。

男とも女ともとれるユニセックスな服を着ている亜希人は顔の影響で女にしか見えなかった。

「ごめんね、急がしちゃって。」

「いや、全然大丈夫。どうせやる事もなかったし。」

「そっかならよかった。」

亜希人は頷いて少し笑った。

つられて友貴も少し笑った。

「じゃあ行こうか。」

友貴の中では亜希人をデートに誘ってる気分。

亜希人もうん。と大きく頷いて友貴について来た。

「へえ。双子の弟がいるんだ。」

「うん。でも弟は地元に残るって。」

「そもそもなんで転校して来たの？」

「僕の地元田舎だから、やっぱり都会に行きたいなと思って。」

「この時期に？」

「やつとお父さんが許してくれたんだよ。僕の家族みんな過保護だから。」

亜希人が小さな石を蹴って笑った。

あれから近くのスーパーで買い物を買ませた2人はいつの間にか仲良くなっていた。

「俺がもし上山のお父さんだったら絶対一人暮らしはさせないな。」

「何で？」

少し前にいた亜希人は振り返って小首を傾げる。

「可愛いから。」

そういつて友貴は亜希人の頭をくしゃくしゃと弄った。

「やめてよー。」

亜希人は笑って友貴に仕返しをした。

周りから見ればカップルがいちゃついているように見えるだろう。

友貴もいつの間にかそんな気分だった。

「僕の家族本当に過保護だからさ、一年もしないうちにみんなでうちに来るかも。」

「いいじゃん。一人よりは家族と暮らせるほうが良いだろ。」

「そうかな。各務くんはなんで一人暮らししてるの？」

「俺の家は家族みんな海外に行った。」

友貴は自分の指を飛行機と見立てて遠くを指した。

「なんで各務くんは残ったの？」

「海外とか怖いじゃん。言葉通じないし。」

「確かに。」

いつの間にかアパート前まで来ていた。

今日4回目の水溜りを見て少し笑った。

「どうしたの？」

「いや、何でもないよ。そうだ、今日俺ん家で食べてたら？」

「でも迷惑じゃない？」

「大丈夫。今日は上山だけじゃないし。」



友貴の言葉に亜希人は頭の上にハテナマークが出ていた。

そんな亜希人を見て友貴は笑った。

「とにかく後で来いよ。」

「うん。じゃあ待っててね。」

亜希人と別れた後友貴は部屋に入って行った。

「ただいまー。」

「遅いよお兄ちゃん。」

中に入ると今朝会った子供が玄関前にいた。

「ゴメンね空。今から急いで作るから。」

「今日何作ってくれる?」

「友貴くんお帰り。遅かったわね。」

奥の方からこれもまた今朝会った女の人が出てきた。

「すみません彩華さん。友達と買い物してたんです。」

「そうなの。じゃあ空頼んだわね。」

彩華さんはそう言うと鞆を持って外へ出て行った。

それと入れ違いに亜希人が入ってきた。

「おじゃましてーす。」

「おう上山、悪いけど空と遊んで待っててくれないか？今手が離せ無いんだ。」

友貴はキッチンの前に立ち調理を始めた。

「そら？」

亜希人は何の事かわからず奥まで入ってきた。

そして小さい男の子をみつけた。

「お兄ちゃんこの人だーれ？」

「俺の友達。仲良くするんだよ。」

「うん。お兄ちゃん遊ぼう。」

空は亜希人に抱きついた。

亜希人はまだ状況が理解できずに呆然としていた。

「各務くんもう子供いたの？」

「は？いるわけ無いじゃん。」

ケラケラと笑う友貴に亜希人が少しムツとした。

「さつきキレイな人がここから出てっただろ？」

「うん。スゴイキレイな人だったよ。」

「その人の子供。」

亜希人は驚いた。あれだけ若そうな人に子供がいるとは全く思えなかった。

「あの人各務くんの彼女じゃないの？」

「あの人は俺のお隣さん。もう結婚して子供もいる。」

なあ。と友貴が言うと空が反応した。

「うん。そうだよ。俺のお母さんだよ。」

「そうなんだ。それでなんでこの子がここにいるの？」

「空のお父さんは仕事が忙しくて、お母さんは月1で食事会があるんだよ。」

「それで今日がその食事会の日なんだ。」

空はまだ亜希人に抱きついたままそうだよと肯定した。

亜希人は空をつれてソファーに座った。

「じゃあ各務くんは月1でこの子の子守してるんだ。」

「まあ半分正解かな。」

「半分？」

亜希人は空と遊びながら友貴と話していた。

「そう半分。俺可愛いもんが好きだからさ、空見ると癒されるの。」

「そうなんだ。確かにこんな弟いたら毎日楽しそうだね。」

「それに月1じゃなくてよく子守してるの。そういえば上山弟いるんじゃないかった？」

「いるよ。でも空くと全然違う。スゴイ口悪くてさ、しかも弟も過保護だから亜希人は俺が守るとか言っちゃって。」

「頼もしいじゃん。」

友貴がまたケラケラと笑った。

「でも僕は空くんみたいな可愛い弟が欲しかったな。」

「弟からしたら上山の方が弟に見えるんじゃないの。」

「それ言われた。俺の方が兄貴みたいだって。」

「さ、出来たよ。」

友貴は作り終わったカルボナーラをテーブルへと運んだ。

「スゴイ。カルボナーラ作れるの？」

「覚えれば意外と簡単だよ。」

「やった。お兄ちゃんのスパゲッティー俺大好き。」

「本当可愛いな空は。」

友貴は空の頭を撫でた。

「食べられないよ。」

「ハハ。ゴメン。」

「なんか2人見てると本当の兄弟みたい。」

「本当に？お兄ちゃん本当のお兄ちゃんになるの？」

「なるわけじゃないよ。そう見えるだけ。」

「可愛いな、空くんは。」

亜希人が空を見て笑った。

「上山も可愛いよ。」

「そんなことないよ。」

「可愛いつて。」

「ねえ、お兄ちゃん達ってカップルなの？」

「ハハそう見える？」

「うん。」

空の言葉に友貴が笑った。亜希人は豆鉄砲を食らったみたいにキョトンとしていた。

晩御飯を食べ終わるとゲームで遊んだ。

いつの間にか9時を過ぎていた。

「そろそろ彰芳さん来るな。」

「お父さん帰ってくるの？」

「嬉しそうだね、空くん。」

「うん。俺お父さん好きだもん。お兄ちゃんも好きだよ。」

「ありがとう空くん。」

亜希人が空の頭を撫でると2人でニコッと笑った。

『カシヤッ』

2人でその音の方を向くと友貴がデジカメで写真を撮っていた。

「コレはいい。」

友貴はデジカメをみて笑った。

それと同時にインターホンの音が聞こえた。

「ただいま。空いるか？」

急に扉を開けて入ってきたのは空のお父さん 彰芳さんだった。

「いい所に来た彰芳さん。コレみて。」

友貴が写真を見せると彰芳が叫び出した。

「空超可愛い。もう一人の子誰？この子も超可愛い。」

彰芳さんが一人興奮しているとソファアに座っている亜希人と空をみつけた。

「写真の子。」

デジカメと本人を何度も見比べ亜希人を指差した。

「はじめまして、上山亜希人です。」

「亜希人くんね、もう覚えた。友貴コレはいい。」

「でしょ。彰芳さんならわかってくれると思ったんだよ。」

「いや、コレは誰が見ても可愛いつてなるぞ。」

2人で盛り上がっているところに空が入っていった。

「お父さん、眠いからもう帰ろう。」

「おう、そうだな。じゃあ友貴今日はありがとうな。亜希くんもありがとな。」

「お兄ちゃんバイバイ。また遊んでね。」

空は亜希人と友貴に笑って手を振った。

嵐のように来た彰芳さんはすぐに友貴の部屋から出ていった。

2人きりになった部屋で亜希人はソファアのクッションを抱きしめた。

「あー楽しかった。」

亜希人はクッションに顔を埋めて叫んだ。

「そう？それはよかった。」

「ご飯も美味しかったし、空くんも可愛かったし、それに初めて友達もできたし？」

「初めて？」

友貴はソファアに座りながら亜希人に聞いた。



「そう、さつきも言ったけど弟が過保護だね。男でも女でも変な虫つけちゃいけないってずっとそばにいたから。」

「そうなんだ。」

「うん。だから今日は各務くんといっぱい話せて嬉しかった。」

「じゃあさ俺の友達紹介するよ。めちゃくちゃいい奴等ばっかなんだよ。」

友貴はすごく楽しそうに笑った。

亜希人はその笑顔をみて優しく笑った。

「うん、ありがとう。」

「どづいたしまして。」

「あ、そろそろ帰らなきゃ。」

「ゴメンな子守手伝わせたみたいになって。」

「だから楽しかったからいいって。」

亜希人は立ち上がって笑った。

友貴は亜希人を玄関まで送った。

「そうだ明日一緒に学校行かない？」

「本当に？そういうのやってみたかったんだ。」

「それとさ………亜希人って呼んでいい？」

「うん、いいよ。じゃあ友貴くんって呼んでいい？」

「友貴でいいよ。」

亜希人は首を振って友貴を見た。

「ううん。友貴くんの方がしっくり来る。」

「じゃあそれでいいよ。」

「今日はごちそうさまでした。ほんっとに楽しかったよ。」

「材料さえ持ってくればいつでも作るよ。」

笑いながら言った。

その言葉に亜希人は笑った。

「じゃあ材料だけ揃えてくよ。」

「いつでもいいからな。」

「うん。じゃあおやすみ。」

「おやすみ。」

亜希人が出ていった後部屋を見るといつもより広く感じた。

食器を洗って、シャワーを浴びた。

机の上に置かれていたデジカメを見ると先程の空と亜希人が居た。

ベッドにダイブして目を瞑るとすぐ眠っていた。

## 柴田の異変

朝、目が覚めたとき体が重かった。

昨日あんな約束しといて風邪で休むじゃ格好がつかない。

置きあがるつと手をつくとか何か柔らかいものを触った。

「うわっ。」

慌てて手の下を見るとそこにはまだ気持ちよさそうに寝ている空がいた。

あまりにも可愛いその寝顔に少しだけ見惚れる。

「お兄ちゃんおはよう。」

眠たそうに目を擦りながら空が起きた。

「いつの間に部屋入ってきたんだよ。」

「さっきだよ。」

まだ眠そうな空を見ると学校へ行く準備はもうしてあった。

制服に着替えた空の横にはまだキレイなランドセルが置いてある。

「やっぱりここにいた。ごめんね友貴くん。」

部屋の扉を開けて入ってきたのは彩華だった。

彩華はまだ眠そうな空を無理矢理立たせ部屋を出て行った。

「眠い……。」「

一人になった部屋でまたベッドに倒れこみ二度寝をしようとしたとき不意に時計が目に入った。

いつも起きる時間より10分過ぎてる事に気付くとそこから飛び起きた。

「亜希人と学校行くんだった。」「

急いで朝ご飯を作り学校へ行く準備をする。

トーストを食べているとインターホンが鳴った。

残りのトーストを一気に口につめこむと鞆を持って玄関へ向かった。

玄関のドアを開けると亜希人が笑顔で立っていた。

「おはよう。友貴くん」

「おはよう。」「

外へ出て鍵を閉めると亜希人は嬉しそうにまた笑った。

「初めてだよ、こんなの。」「

「そういえばそんなこと言ってたな。」

友貴が亜希人の方を向くと亜希人が大きく頷く。

2人でアパートから歩いていく。

「お兄ちゃん、いつてらっしゃい。」

大きな声に振り向くと空が大きく手を振っていた。

「いつてきます。」

「空、お前遅刻すんなよ。」

友貴と亜希人も大きく手を振った。

「大丈夫だよ。」

空はそう言って走って行った。

2人はまた学校へ向かい歩いて行った。

他愛のない話で盛り上がった2人はいつの間にか学校に着いていた。

「なんか友貴さんと話しているとあつという間だったよ。」

「そうだな、楽しかったな。」

2人が並んで教室に入ると亜希人はあつという間に多くの人に囲ま

れた。

「そつだ亜希人昼飯一緒に食おうな。」

「・・・う、うん。」

大勢に囲まれた亜希人は苦しそうに答えた。

「どうしたの友貴。転校生ともう仲よくなったの？」

「まあな。」

愁は驚いたような顔でこちらを振り返った。

「コンビニで別れてから何があったんだよ。」

「確かに、いくらなんでも急すぎるだろ。」

柴田と九条も同じように友貴に尋ねた。

友貴が席に座ると優がいつもどおり友貴の膝の上に座った。

「友ちゃん何があったの？」

「亜希人、俺の部屋の隣に住んでたんだよ。」

「転校生が？」

「うん。それで昨日一緒に飯食って仲よくなった。」

「羨ましい。なんだよその展開。」

柴田が友貴の肩を掴み前後に揺らした。

「優ちゃんに迷惑かかってるだろ。」

「やめてよ柴田くん。」

「あ、ゴメン優ちゃん。」

「僕達には紹介してくれないの？」

愁がニヤツと笑う。

「昼飯一緒に食べる約束したからその時に紹介するよ。」

「やったー。」

「優ちゃん喜びすぎ。」

興奮して暴れる優を友貴が抑えた。

「だってまたお友達が増えるんだよ。」

「そうだねー。」

もう優ちゃん可愛い。そう言って友貴は優を抱きしめた。

「なんか2人見てると兄弟とか、親子にしか思えないんだよな。」



九条が笑いながら言う。

それと同時に担任が入ってくる。

みんなが席に座り静かになる。

午前の授業が終わると亜希人の周りにはまたすぐ人が集まる。

「ゴメン、僕行くところがあるから。」

亜希人は人ごみを抜けて友貴達の所へ歩いた。

「まあとりあえず食堂行こう。」

教室から食堂へ移動するがさすがに愁と優、更に亜希人が加わると周りには人が集まってくる。

食堂につくと自分が食べるものを持って席に座った。

「みんな知ってると思うけど転校生の上山亜希人。」

「よろしくお願いします。」

亜希人がぺこりと頭を下げた。

それにつられるようにみんなが頭を下げた。

「それで俺の隣にいるのが優ちゃん、その前が愁、その隣が九条で最後に柴田。」

名前を呼ばれると順番に一人ずつ頭を下げていった。

「みんな良い奴だからすぐに仲よくなると思うよ。」

亜希人が笑った。

周りのみんなもふわりと笑った。

その後友貴以外のみんなは亜希人と楽しそうに話していた。

「友貴くんありがとね。みんな本当に良い人だったよ。」

「だから言っただろ。」

「会ってすぐ友貴の料理食えるなんて運がいいな上山。」

「友ちゃんの料理本当に美味しいもんね。」

「え、俺食ったことないけど。」

「柴田いつも友貴の家に行かないからだよ。僕も何度か作ってもらったよ。」

愁のとどめの言葉に柴田が俯いた。

「お前誘ってもいつも来ないもんな。」

「俺にだって用事くらいあるんだよ。」

柴田が急に大声を出した。

「そんなに怒るなって、今度作ってやるから。」

「そう言えば空くん元気？」

「空くん知ってるの？」

亜希人が愁に尋ねた。

「大体みんなが来るとき空もいるからな。」

「空くんゲーム強いよね。」

優ちゃんがスパゲッティを食べながら言う。

「俺も負けた。あれは相当やりこんでるよな。」

「九条が負けるとか相当強いんだな。」

「今度俺が行って倒してやる。」

柴田が急に立ち上がった。

周りにいた人が一斉に柴田を見た。

「なんかごめんなさい。」

柴田がゆっくりと座った。

「そろそろ戻るか。」

「だね。それにしても今日は人が多いね。」

「亜希人に愁に優ちゃんがいるからな。」

「関係無いと思うけどな。」

みんなで食器を片付け教室に戻る途中、九条が眼鏡の女の子とぶつかった。

女の子はぶつかった拍子に倒れて、眼鏡を落としてしまった。

「あ、ゴメン。大丈夫？」

「ハイ、大丈夫です。」

九条が手を差し伸べるとその女の子は顔を赤らめた。

柴田が眼鏡を拾って彼女に渡した。

女の子は立ち上がって眼鏡を貰うとすぐ走って行った。

「出た、天然タラシ。」

「は？何がだよ。」

友貴の言葉に九条がムツとした。

柴田が立ち止まったまま女のこのほうをずっと見ていた。

「柴田どうしたの？」

愁が柴田に話しかけても反応が全く無い。

それを見た九条が柴田の肩をゆらした

「わっ何だよ、急に。」

「急じゃないよ。ずっと呼んでたんだぞ。」

「そうなの。ゴメン。」

柴田はそのままみんなの所に走って行った。

その後午後の授業もすべて終わり教室には生徒は殆ど残ってなかった。

「でね、空くんが朝挨拶してくれて。」

「そうなんだ。空くん可愛いよね」

亜希人はすっかりみんなと馴染んで今は愁達と喋っている。

そのグループの中にいるが柴田は全く話に入ってなかった。

それどころか話自体聞いてなく上の空だった。

それから柴田は話に参加しなかった。

いつもは率先してついてくるコンビニにもついてこなかった。

「柴田どうしたんだろうね。」

「僕何かやっちゃったかな？」

「上山の所為じゃないよ。ボーっとしだしたのはその後だったし。」

「ならいいけど。」

九条と亜希人が話している後ろで愁と優と友貴もまた柴田の話をしていた。

「珍しいよね。柴田くんが来ないなんて。」

「愁は奢ってもらえなくて残念だったな。」

「そんなことより柴田が喋らないことの方が心配だよ。」

「確かに。柴田くんいつつも喋ってたもんね。」

愁の言葉に優が賛同した。

「柴田にも色々あるんだろ。」

「何か悪いことじゃなきゃいいけどね。」

「そんなに知りたいなら本人に聞いてみたら？」

友貴の言葉に前にいた2人も反応した。

「友ちゃん聞いてくれる？」

「え、俺？」

「言いだしつぺだろ、お前。」

「友貴くんお願い。」

「決定だね。」

「うそーん。」

友貴は自分が何となく言った言葉に後悔した。

後悔しながら見上げた空は夕焼けで真っ赤に染まっていた。

「キレイ……。」

「本当だ。」

亜希人が空を見上げる。

九条も愁も優も空を見上げた。

「……柴田何やってんだろつな。」

友貴の眩きは誰にも聞こえず消えていった。

## 柴田を尾行。

次の日、昨日と同じように亜希人と学校へ行くと柴田はまだ来ていなかった。

「あれ、柴田は？」

「まだ来てない。」

九条が振り返り答えた。

自分の席に優が座っているのを見て友貴は立ったままだった。

「それよりちゃんと聞いてよ。昨日言ってたこと。」

「はいはい。聞けば良いんですよ。」

「あ、柴田くん来たよ。」

みんなが一斉に振り返ると柴田が眠そうに目を擦って教室に入ってきた。

「今日遅いじゃん。どうしたんだよ。」

「色々あってさ。昨日寝れなかったからさ。」

愁が小声で聞けと言った。



友貴が柴田の前まで歩く。

「昨日さ……その……夕日見た？凄く綺麗だったよ。」

「昨日は見えてないな。」

友貴の質問に周りにいた4人はため息を吐いた。

友貴が笑って愁の前に行く。

「無理だよ。やっぱり。」

「言い出したの友貴だよ。ちゃんとやってよ。」

お互い小声で言い合う。

「わかった。柴田、放課後話あるから。」

「？おう、わかった。」

すぐに九条に手を引かれ柴田から少し離れた。

「今聞けよ。何やってんだよ。」

「いきなり昨日どうしたのなんて変じゃん。」

「でもそれを聞くんってお前が言い出したんだろっ。」

「ちょっと待てよ。放課後まで猶予をくれたら俺も頑張るから。」

「絶対だな。」

「絶対。」

友貴と九条はお互い真剣な眼差しで見つめ合っている。

そのあとすぐに自分の席に戻って友貴はこれからどうするか考えた。なにかあった？じゃおかしすぎる。なにがあったかかは自分で探つてやる。

友貴はそう決めて一人気合を入れた。

授業中に柴田の事を観察するが特に変わった様子は無かった。

「全然わかんねー。」

「友ちゃん、大丈夫なの？」

「大丈夫。俺は探偵だから。」

「は？」

「ゴメンなさい。冗談です。」

九条の本気の「は？」に少しふざけすぎたと反省する。

「そういえばさ柴田放課になるとどっか行くけどそこにヒントがあるんじゃないの？」

「はっ、愁するどい。」

友貴は急いで教室を出て柴田を探し始めた。

色々探して見るが柴田は見当たらない。

1年の廊下を探して見るとそこには柴田がいた。

柴田は1年の女子と喋っていた。

「まさか、柴田の彼女。」

友貴は咄嗟に階段側に隠れこっそり柴田の方を覗いた。

そこにいたのは昨日九条とぶつかった眼鏡の女の子がいた。

また階段側に隠れると友貴は一人呟いた。

「昨日の今日で付き合い出したのか？」

もう一度覗くと1年の男子と目が合った。

その男子に向かってチヨイチヨイと手招きをした。

「あの、なんですか？」

小走りで走ってくる男子をすぐ引き寄せた。

「あそこに2年の男子がいるだろ？そいつと喋ってるの誰かわかるか？」

「ああ、確か1年4組の東沙希です。」

「そうかありがとう。お礼にこれをやろう。」

「あ、ありがとうございます。」

ポケットに入っていた飴をその男子に渡すと友貴は自分の教室へともどって行った。

友貴は教室に戻ると上機嫌で席に座った。

「なにかわかったの？」

「ナイシヨ。」

「教えてよー。」

「いくら優ちゃんでも今回はダメー。」

優が唇を尖らせた。

「かーわーいーいー。」

友貴は優の頭を撫でた。

「友ちゃんのケチ。」

優はその手を払い除け自分の席に戻って行った。

「あらら嫌われちゃった。」

「自業自得だろ。」

「しょうがないだろ、コレは簡単に言えることじゃないんだから。」

1日の授業が全部終わると柴田はすぐに教室から出て行った。

「あいつ、浮かれて俺との約束忘れやがったな。」

柴田を追いかけ友貴が教室をでた。

「柴田くん教室出てったよ。」

「友貴まで行っちゃったよ。どうする?」

「もちろん友貴を尾行するでしょ。」

「面白そうだね、それ。」

「絶対に何があったのか知ってやる。」

優は友貴に秘密にされた事をいまだに根に持っている。

4人は鞆を持って友貴の後を追い走って行った。

その頃友貴は下駄箱で隠れていた。

少し離れていた校門前で柴田が一人で誰かを待っている。

少し経った後一人の女が柴田の前で止まった。

「ふん。俺の思った通りだ。」

2人が校門を出るのを見た友貴は一気に校門までダッシュした。

その後を追って4人がついて来ているのも知らずに。

2人が大通りに入って行くと友貴は隠れるのをやめた。

そこから少し歩くと2人は大通りに面したカフェに入って行った。

「懐かしいな、おい。1年前よくココに通ったな。」

友貴がこっそり中を覗くと2人が楽しそうに喋っているのが見えた。

「懐かしいなココ。」

「うわっお前らなんでココにいるんだよ。」

聞き覚えのある声に振り返るといつもの4人がいた。

「そうそう僕ココのカフェオレ大好きだったんだよね。」

「僕ホットミルクしか飲めなかったな。」

「へーみんな通ってたんだ。凄いお洒落だね。」

お洒落な外装に好印象で入ったがそれ以上にここで飲んだ珈琲の味が忘れられないって九条が通っていたカフェだった。

友貴や愁、優の3人は苦いものが苦手であり通わなくなったが九条と柴田は何度も足を訪れていた。

「シカトすんなよ、なんでここに居るんだよ。」

「友貴を尾行してたらここに来た。」

「柴田くん彼女が出来たんだね。」

「そりゃボーっとするね。」

「よかった僕の所為じゃなくて。」

九条がカフェに入ろうとする。

それを見て友貴が慌てて止めようとする。

「バカ、お前何やってんだよ。」

「久しぶりにここの珈琲飲もうと思って。」

「どう考えたって邪魔だろ。」

「あ、そうか。」

九条は少し寂しそうにカフェを眺めた。

「今日は我慢するか。」

九条と友貴が中を覗くと柴田と沙希が楽しそうに喋っていた。

「僕あの子見た事ある気がするんだけど。」

「当たり前だろ。昨日九条にぶつかった子なんだから。」

「ああ、あの子か。」

九条が思い出したように声を上げた。

「そろそろ俺らも帰るぞ。バレたら柴田怒るから。」

「そうだね。もう帰ろうか。」

4人はカフェから離れて行った。

「違うところでみた気がするんだけどな。」

「愁何やってんだよ。行くぞ。」

「あ、待って。」

一人残された愁は走って4人の所へ戻って行った。

「柴田嬉しそうだったな。」

「ああ。こんな事で良かったな。」

「確かに。何か悪い事してたらどうしよう、とか言ってたもんね。」



「僕、お腹空いた。」

「俺も腹減った。友貴飯作ってよ。」

九条が友貴の肩に腕を回した。

「抜け駆けした事これで許してやるよ。なあ優ちゃん。」

「うん。それでいいよ。」

「そんな、まだ怒ってるの?」

前を歩いている優に尋ねた。

「ご飯作ってくれたら許してあげてもいいよ。」

優は振り向いて満面の笑みで言った。

「しょうがないな。作りますよ。」

「友ちゃん大好きー。」

優は友貴に抱きついた。

「友貴大好きー。」

九条も抱き着いてきた。

「気持ち悪いな、コノヤロー。」

友貴が笑った。つられてみんなも笑った。

その日は10時まで友貴の部屋で喋り続けた。

## 柴田の恋

朝、学校に着くと柴田は既に学校にいて机に伏せていた。

「どうしたんだよ、コレ」

「さあ、僕が学校に来たときにはもうこうなってた。」

「僕が来たときもそうだったよ。」

「柴田どうしたんだよ。」

友貴が揺らすと柴田はムクツと起き上がった。

そして周りを見渡してため息を吐いた。

「柴田くんどうかしたの？」

「昨日、振られた。」

「え、あの子に？どうして？」

友貴は思った事を素直に言った。

「あの子？なんでお前が知ってるんだよ。」

「いや、その昨日たまたま見ちゃって。」

「そうか、昨日2人で帰ってたしな。さすがにばれるか。」

柴田はまた机に伏せた。

「あんまり落ち込むなよ、振られることなんて誰にでもあるんだから。」

九条の言葉に柴田は少しムツとした。

「柴田今日俺ん家来るか？飯作ってやるぞ。」

「本当に？…………でも今日はいいや。そんな気分じゃない。」

柴田は自分の腕を枕のようにして眠る体制になっていた。

「柴田……………そんなに落ち込むなよ。」

「お前の気持ちはわかるよ。」

九条の言葉に柴田が急に立ち上がり九条の胸倉を掴んだ。

「お前に…………お前に俺の何がわかるんだよ。」

友貴が慌てて柴田を抑えると柴田は急に走って教室から出て行った。

教室中の生徒がそんな柴田を見ていた。

「なんなんだよ、アイツ。急に怒り出して。」

「俺、アイツ探してくる。」

友貴が教室を出ようとするのと担任に見つかった。

「どこいくんた各務。」

「いや、その。」

「はやく教室入れ。」

先生には逆らえず友貴は教室に入った。

「柴田はどうした。」

柴田の席が空いてるのを見て先生は尋ねた。

「柴田ならさつき」「柴田なら今日は風邪で休むって言ってました。」

他の生徒が先程の状況を教えようとするのと愁がそれを遮った。

そうか。といって先生はそのままHRを始めた。

午前の授業が終わっても柴田は戻ってこなかった。

「どうする、友貴。」

「俺、とりあえず東さんの所に行ってくる。」

「東って誰だよ、友貴。」

九条の質問を聞く前に友貴は教室を飛び出した。

「東・・・・・・・・。」

愁の呟きは誰にも聞こえなかった。

1年の廊下に行くとき沙希を探した。

だがいくら探しても見当たらない。そこに昨日沙希の事を聞いた1年がいた。

「東さんってどこにいる？」

「東ならいつも屋上でご飯食べてますよ。」

「ありがとう。」

友貴は階段を駆け上がり屋上へ向かった。

そこで沙希が友達と楽しそうに弁当を食べていた。

「東さん、ちょっとこっち来てもらえる？」

「え、あ、はい。」

沙希を友達から少し離すと友貴は柴田の事を尋ねた。

「柴田知らない？」

「柴田さんがどうかしたんですか？」

「今日学校飛び出してどっか行っちゃったんだよ。」

沙希は驚いていた。沙希に昨日の事を聞くと沙希はカフェで相談をただけと言った。

「相談？」

「はい、その、九条さんの事で……内緒にしてくださいよ各務さん。」

「九条の事？え、なんで俺の名前？」

「ヒミツです。」

そういうと沙希は顔を赤らめて友達の所へ戻って行った。

なにがあつたの？と友達に聞かれているが沙希は俯いたまま何も答えなかった。

「何で俺の名前。っていうか相談って何だよ。」

友貴は空を見上げた一人呟いた。

結局何も手掛かりは無いまま全ての授業が終わった。

友貴は急いで自分の鞆と柴田の鞆を持って教室を出た。

九条も急いで下駄箱まで走るとそこには手紙が入っていた。

『6時に屋上で待って下さい。』

宛名の無い手紙が1枚置いてあった。

「6時って……。」

友貴はひたすら走っていた。

最初に柴田の家に寄るがまだ帰ってきていなかった。

よく行っていたゲーセンや河原にも行ってみるが柴田はいなかった。

「どこにいるんだよ。まったく。」

柴田を探して走り回っていると愁から電話がかかってきた。

「もしもし友貴。今どこにいる？」

「今、商店街探してるけど。」

「柴田見つかった。あそこのカフェにいた。」

友貴は電話を切ると急いでカフェに向かった。

友貴がカフェについた時ももう5時を過ぎていた。

カフェに入ると珈琲の匂いが充満して懐かしい気分になった。

「柴田、柴田どこ？」

「友貴、こっち。」



カフェのカウンターで柴田と愁が座っていた。

「柴田お前、心配したんだぞ。」

「悪い……………友貴。」

「愁、他のみんなは？」

「九条が用事あるって。2人にはそっちにいてもらった。」

柴田は空になったコーヒーカップをずっといじっていた。

その隣にはコーヒーの代金が置かれていた。

「何があったんだよ。急に学校出て行って。」

「……………昨日さココであの子と喋ってたんだよ。」

柴田は重い口を開けてゆっくり話しはじめた。

「俺あの子がずっと好きでさ。明るくて、いつも笑顔でいて、まさか眼鏡かけてあの学校にいるなんて思ってたなくて。」

「あの子と会ったのはこの前が初めてだろ？」

「やっぱり思い出してないんだ。」

「何をだよ。」

愁の言葉に少しイラつく。

「あの子、マスターの娘さんだよ。」

愁の言葉にマスターが無言で会釈する。

「うそつ、だってあの子眼鏡なんかかけてなかったし、髪の毛もおろしてたじゃん。」

「うん、だから僕も柴田も気付かなかった。」

「あの時、九条とあの子がぶつかった時眼鏡が外れただろ？あの時顔を見て気付いたんだ。」

確かにあの時ぶつかった拍子にこけて眼鏡を落としていた。その眼鏡を拾ったのは柴田だった。

「でも九条は気付いてなかった。」

「アイツはここであの子と話した事なかったしな。いつも一人でコーヒーを飲みながら小説読んでただろ。」

「確かに。」

九条はここに来るとマスターのオリジナルブレンドを飲んで一人推理小説を読んでいた。

この時間が一番落ち着くと友貴達に言いながら。

「それでさ、昨日あの子の所に話しかけに行ったら俺の事覚えてて

くれてさ。」

柴田が少し喋るのをためらった。

愁と友貴は柴田の顔から目を逸らさなかった。

「俺、嬉しくて。無性にココに来たくなって。ココであの子と一緒に昔の事を思い出しながら喋ってた。」

柴田は目に涙を溜めていた。

「そしたらあの子は初めて見た時から九条が好きで、通ってくれた事が凄い嬉しかった。って俺に言っただよ。」

愁の目にも少しずつ涙が溜まっていた。

「好きだって言おうとしたけど、そんな事言われた後に言える訳無いじゃん。」

ずっと俯いたままの柴田が少し顔を上げた。

無理に笑った柴田の目からは涙が零れた。

「それで・・・どうしたらいいって相談されたから、俺みたいになつて欲しくなくて・・・気持ちを伝えるべきだって。」

愁の目からも涙が零れた。

「っ俺、本当にバカだよ・・・。これで良かったんだよ・・・コレで。」

「良い訳ないだろっ！」

愁が柴田の胸倉を掴んだ。

「自分が本当の気持ちを伝えてないのにな……そんなアドバイスすんなよ。」

今まで見た事が無い愁がそこにいた。いつも冷静で他人の事に口出しなんかしない愁がここまで怒ったのを初めてみた。

「じゃあどうすればよかったんだよ！九条が好きだって聞かされた後に俺はあなたが好きだって言えば良かったのか？」

友貴は柴田から目を逸らせた。

「柴田、まだあの子の事好き？」

「好きだよ……」

「じゃあなんで？」

柴田が愁の手を払って友貴の前に立った。

「俺は……俺はあの子の邪魔したくないんだよ……」

柴田がまた無理に笑った。涙はどんどん溢れている。

「本当は気持ち伝える必要がなくなったんじゃないの？自分の好きじゃないって知って気持ちが冷めたんじゃない？」

「ふざけんな！つそんな事で……そんな事で冷めるわけ無いだろ！」

柴田が友貴の胸倉を掴んだ。

「だったら気持ち伝えればいいだろ！何格好付けてんだよ！好きだつて気持ち止めんな！大人ぶってんじゃねえよ！」

今度は友貴が柴田の胸倉を掴んだ。

「っ友貴……。」

友貴が手を離すと柴田がよろけた。

「何やってんだよ！早く行けよ！」

「あの子なら今屋上で九条達と一緒にいるから。」

柴田は友貴と愁の目を見ると頷いて走って行った。

愁もそれについて行った。

「娘は良い人に好かれたんだね。」

マスターがコーヒーカップを片付けながら言った。

「はい。すごく良い奴ですよ。たまに大人ぶって格好つける所ありますけどね。」

友貴はカフェのドアを開けると学校へと向かって走った。  
学校につくとすぐに屋上を目指して階段を駆け上がった。  
階段の途中で沙希の友達が立っていた。

屋上になると亜希人、優、愁、柴田、九条そして沙希がいた。

亜希人と優は外には出ず扉の前で立ったままだった。

愁と柴田は扉のすぐそばで立っていた。

その少し先で九条と沙希が互いに向き合っている。

沙希は泣いて、九条は下を向いたまま動かなかった。

沙希は先程の柴田みたいに無理して笑って柴田の方を向いた。

「・・・柴田さんっ私、振られちゃいました。」

笑いながらも一粒ずつ涙を落ちていく。

その涙を見るように沙希は俯いた。

柴田が一步ずつ歩きはじめた。

「俺、沙希にまだ言っていない事があるんだ。」

柴田が涙を堪えて沙希の前に立つ。

九条の前に柴田が立っている。

「……っなんですか？」

沙希が柴田の方を向く。

すると柴田は大きく息を吸い込んだ。

「東沙希さん！初めて会った時からあなたの事が好きでした！」

屋上から学校中に聞こえるような大きな声で沙希に告白した。

沙希は驚いた顔で柴田の顔を見つめていた。

急な大声に全校生徒が屋上を見上げる。

沙希は震える声で柴田に答えた。

「っでも……っ私は……………九条さんの事が……好きで」

「知ってる。でも俺は沙希のこの気持ちを伝えなかった。」

柴田の目にはまた涙が溜まっている。

「沙希にだけ自分の気持ち伝えろなんて、俺卑怯じゃん。」

柴田の声が震える。

「この気持ちを伝えなかつたら、俺……一生後悔しそつでっ。」

涙がポロポロ零れる。屋上の床の一部が濡れていく。

「っありがとうございます……。」

沙希は柴田に挨拶をすると屋上から階段を降りて行った。

「友貴……っ何でかな……振られたの………  
いスッキリした。」

柴田は言い終わると膝から倒れた。

「九条、ゴメンな。俺の八つ当たりだったよな。」

九条が柴田の前に立った。

「もういいよ、そんな事。俺こそ悪かった。お前の気持ちも知らないで。」

九条の目からも涙が零れた。

みんながその場から動かず泣いていた。誰も喋らず、ただ涙だけがポロポロと零れていた。

日が沈み始めた頃にはみんな壁によりかかりながら座っていた。

「あ、夕日。」

「一昨日の夕日みたい。」



「キレイだね……。」

「あの時柴田いなかったんだよな。」

「そうだったな。」

夕日を見ながらただ何でも無い話をずっとしていた。

すると柴田が急に立ち上がって屋上の中央に走って行った。

「絶対に九条より良い男になってやるー！」

大声で柴田が叫び出すとみんな走って行った。

そしてみんなで訳もなく叫んだ。

「青春って感じだな。」

「確かに。」

友貴の呟きに愁が答えた。

「今日は可愛い要素が全くなかったな。」

「まだそんな事言ってるの?」

「いつだって言いますよ。俺の生きがいですから。」

「いつでも楽しそうだね。友貴は。」

「まあね、今日は愁のアツイ所が見れたからまあいいか。」

愁の頭をくしゃくしゃと撫でると愁がニヘラと笑った。

「「わーいーいー」」

友貴と柴田の声がかぶった。

「お、柴田復活か。」

「まあな。それにしても今の愁可愛い」

「可愛くない。」

愁が怒って2人を追いかけた。

日も完全に沈み暗くなった頃、やっと学校を出た。

「今日は星も綺麗だな。」

「わー本当だ。」

優が友貴の所まで走ってきた。

「優ちゃん、なんかロマンチックだね。」

「うん、そうだねー。」

優の頭に手を置き友貴は星を眺めた。

「癒しだなー。」

「何が？」

「何でも無いよ。」

友貴は優に笑いかけると優も笑った。

何となく柴田の家の前まで歩いた。

「じゃあな柴田。」

「明日はちゃんと授業受けるんだよ。」

「おう。明日は脱走しないから大丈夫。」

柴田が家に入ると自然と他のみんなも解散した。

もう一度空を見上げると一瞬流れ星が見えた。

明日は何か良い事があるぞと笑いながら亜希人と一緒にアパートへ帰って行った。

## イケメンと美女。

柴田が振られた二日後、教室にはいつものように騒ぐ柴田が戻っていた。

「聞いて聞いて朝学校来るときにさ、福森明菜に会った。」

「そりや会つてでしょ。この学校の生徒だし。」

「違つんだって。福森明菜に挨拶されたんだよ。」

「よかつたね。」

「いや、反応薄すぎだろ。あの福森明菜だぞ。」

愁の素っ気ない返答に柴田が机に手を置き前のめりになる。そんな柴田を見て優が笑った。

「柴田くん嬉しそうだね。」

「そりや嬉しいに決まってるじゃん。福森明菜が目の前で俺に挨拶したんだぜ。」

「それは羨ましいな。」

九条が反応した。柴田が九条を見てニヤツと笑う。

「ふん、いいだろ。」

「柴田のくせに。」

九条は柴田の首に腕を回した。

「なあ友貴も羨ましいだろ？」

「全然。俺は愁と優ちゃんと亜希人がいるから。」

「意味分らないし。」

「愁がいれば毎日ハッピーなんだよ。」

友貴が愁の頬つぺたをつつく。

「僕は友ちゃんがいればハッピーだよ。」

「相変わらず可愛い事言うな優ちゃんは。」

優が笑顔になる。亜希人が後ろから友貴に抱きつく。

「僕も友貴くんいると楽しいよ。」

「今俺すごいハーレム状態じゃない？」

友貴が柴田と九条に自慢する。

「なんかズルイ。一人寄越せ。」

「嫌だねー。」

友貴が舌を出す。柴田と九条は2人で友貴の頬を抓った。

「いひゃい、いひゃい。」

友貴が大袈裟に暴れる。

亜希人と優は少し離れて友貴を見ている。

「仲良いねみんな。」

「うん。楽しそうだね。」

亜希人と優が微笑む。

急に教室の外が騒がしくなる。

男子の殆どが廊下に出る。

柴田が廊下の方を覗くと急いで戻ってきた。

「福森明菜が来てる。」

興奮したように柴田がいうと九条が急いで廊下を覗いた。

「マジだ。……青山と一緒にいるぞ。」

九条が振り向いて説明するように言う。

その言葉を聞いた女子も廊下に出て行く。

今教室には友貴と愁、優、そして亜希人の4人しかいない。

「全くどこのアイドルだよ、青山は。」

「福森さんも人気だね。」

友貴と愁が座りながら廊下を見る。

その後ろに亜希人と優が立つ。

「僕2人とも知らないな。」

「青山くんは凄い格好良いし、福森さんは凄い綺麗な人だよ。」

「それしか言い様が無いよな、あの2人は。」

「確かにね。」

しばらくすると教室の前が一段と騒がしくなる。

「友貴、福森明菜がこっちに来てる。」

柴田が叫ぶように言った。

「ちゃんと聞こえてるから、そんな大きな声出すなよ。」

「おい、こっち向かってくるぞ。」

九条も大きな声で叫ぶ。

更に教室前は騒がしくなる。

今、教室の前には福森明菜と青山が2人で並んで立っている。

「友貴ー!。」

青山が友貴の方へと走ってくる。

友貴は咄嗟に立ち上がり亜希人の後ろに隠れた。

「何しに来た。」

亜希人の後ろから顔を出す。

青山が不服そうに唇を尖らせる。

「隠れることないだろ。」

「お前のタツクルは強烈だからな。」

「そついえばその子誰?」

「俺のカノジヨ。」

友貴が亜希人の肩に腕を回し引き寄せた。

「お前にこんな可愛い彼女できるはずないだろ?」

「ま、確かにな。下見てみ。」



言われるままに青山が下を向く。

「ズボン穿いてんじゃない……男？」

青山が驚く。

「なんでお前の周りは可愛い男子ばっかなんだよ。」

「日頃の行いがいいから？」

「普通女だったらーとか悔しがるだろ。」

「可愛ければ関係無いね。」

友貴が優と愁の頭をくしゃくしゃと触る。

青山は思い出したように友貴の顔を見る。

「あ、そうだ友貴、明菜さんが話あるって。」

「俺に？」

青山が明菜を指差す。

友貴は呆然と立ち尽くしたまま微動だにしない。

「おい。」

青山が友貴の目の前で手を振る。

「はっ、俺に？」

意識を取り戻した友貴が再度尋ねる。

「はい、少しお話したいことがあって。」

福森さんは立ち振る舞いまで綺麗だ。しかも言葉遣いも綺麗。綺麗な人も良いかも。

友貴がそんな事を考えていると青山に腕を引っ張られた。

「ここじゃあれだから、ちょっとこっち来い。」

青山に引っ張られるまま友貴は教室を出てった。

それに続いて明菜も出て行く。

アイドル2人がいなくなった教室は驚く程静かになった。

「行っちゃったね。」

「うん。」

亜希人と優が呆然と立ち尽くしていた。

「はあ。」

愁をため息を吐くと腕を枕にして眠る体勢になった。

数分すると友貴が一人で教室に戻ってきた。

やけに嬉しそうな顔をしていた。

「なにがあつた？」

帰りを首を長くして待っていた柴田が友貴の肩を掴む。

「いろいろ。」

友貴が笑って誤魔化する。

「何だよ色々つて。」

「色々はいろいろなんだよ。」

愁が起き上がる。

「おかえり。」

「ただいま、俺がいなくて寂しかった？」

友貴が笑う。

「はいはい、そうだね。」

「もう愁ったら照れちゃつて。」

始業のチャイムが鳴って友貴は席に着いた。

友貴はいつまでたっても嬉しそうに笑っていた。

全ての授業が終わった。

「悪い。俺用事あるから、じゃあね。」

友貴は一目散に教室を出ていった。

「何があっただろうね。」

「帰ってきてからずっと笑ってたよね。」

愁が廊下に出て友貴の後姿を見ていた。

「……………」

愁の異変に気がついた九条が声をかけた。

「どうした愁？」

「ううん、何でもないよ。」

そついうと教室に入っていった。

いつもより一人少ない静かな教室に。

## イケメンと美女。(後書き)

初めてのあとがきです。

とりあえず駄文ですいません。

でも次も読んでくれたら嬉しいです。

あとアドバイスとかこういう話を読みたいとか言ってくれらるとても嬉しいです。

リクエストあれば頑張って書きます。

最後に来週まで予定がぎっしりで続きが書けない状態なので一週間お休みします。

時間があったらちよくちよく書いて投稿するかもしれませんが。

とりあえずここまで読んでくれてありがとうございます。

ではさようなら。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5691i/>

---

可愛いもんには目が無い。

2010年12月31日05時17分発行